

殿村遺跡とその時代～中世の山寺・山城・居館～

長浜市立長浜城歴史博物館長 中 井 均

はじめに

改めましてこんにちは。ご紹介いただきました中井と申します。よろしくお願ひします。このような立派なホールでお話しできる内容かどうかわかりませんが、よろしくお願ひいたします。実は昨日から松本の方に寄せていただきまして、昨日早速中の陣の城跡にあります、石垣を伴う削平地を少し見せていただいて、それから松本城を見に行って、今日は朝から松本藩主の墓を見学させていただきました。私は今ご紹介していただきましたように城の研究をしております。お城の研究と言いますと、松本だったら皆さん松本城というふうに思われるわけですが、私の研究はどちらかというと松本城よりも古い時代の城、つまり虚空蔵山城でありますとか、例えば松本の周辺ですと、桐原城でありますとか林大城とか林小城といった戦国時代の山城の研究をしています。で、実は今から数年前に殿村遺跡が発掘をされた時にですね、長野県に住んでいるお城を研究している仲間から、松本の方で15世紀の石垣が出てるらしいという電話をいただいたですね、大変驚いたわけです。皆さん方は石垣というとお城につきもので、戦国時代のお城から石垣があるように思われていますが、実は戦国時代のお城というのは、城という字を書いてもらったらわかるように土から成るということで石を伴わないんですね。ですから西暦1400年代の石垣が検出されたということは、関西、つまり石垣というのはどうしても西国の方が先行しますので、関西でもそれはちょっとありえないと思いたわけですね。当初長野の友人から電話をもらった時には、きっと調査が間違っているのだろうと思ったわけです。ところがそうこうしているうちに松本市の方から電話をいただいたて、今大竹課長補佐のほうからお話のありました殿村遺跡の調査指導委員会に入らないか、ということで寄せていただいたわけですね。その時に驚いたのはまず現地を見てくれということで、殿村遺跡の現場に寄せていただきました。その時に車でこの旧四賀村に入ったときにですね、あの美しい虚空蔵山を見た時に、アッ、これはなんかあってもいいのかなという、すごいイメージ先行論で申し訳ないんですが、あの山の麓に15世紀の石垣があってもいいのかなというイメージをもつほど私が最初に見た虚空蔵山の印象というのはすばらしいものでした。

ところで城の専門家がなぜ、城でもない殿村遺跡の調査指導委員会に呼ばれたのかということを申し上げますと、まず、山城には人は住んでいないわけです。たとえば虚空蔵山のような高い所に人間が住めるわけがないので、普段はその山麓に館を構えて暮らす、これはどこのお城でもそうなんですね。あの林大城にしても小笠原氏がですね、上にずっと住んでいるのではなくて麓に館を構えています。で、これがセットになります。戦になると後ろの山城に立て籠もる、普段はその山麓に住むというセット関係ですね。殿村遺跡はそういう意味では会田氏の虚空蔵山城の麓の館ではないか、そういう館だとお城を研究している中井を呼んだらどうか、ということだったわけです。で、まさに私も最初に見せていただいた時は虚空蔵山に伴う館ではないか、というふうな思いを持ったわけです。ということで城を研究している私に声がかかったということなんですね。いずれにしろお城を研究しているとどうしても近世のお城への、つまり松本城へ流れが行くわけですけども、その中でお城と石垣というのはどうしても切り離せないわけですから、この石垣の問題というのは大変大きな問題なわけですね。先ほど申し上げましたように戦国時代の城というのは土造りですから、日本列島の各地で土造りのお城が如何に石垣造りの城になっていくのか、というのは大きな問題になっています。そのひとつがひょっとすると殿村遺跡で解明できるかもしれない。つまり15世紀という西国でも非常に古い段階の石垣がこの松本の地といいますか、四賀の地で検出され



写真1 殿村遺跡の石垣

たということは、石垣を考える上で非常に重要な遺跡なわけです。単にお城と館ということだけではなくて石垣という日本の土木施設といいますかね、土木工事の年代を決める上で大変重要な遺構が出たなあとということで驚いたわけです。もう私たちにすれば1400年代の石垣が出土したというのはもうすごい驚きであったわけなんですね。

戦国時代の城は土の城

さあここからが今日の私の話の主題になるわけですが、先ほど竹原さんの方からこの殿村遺跡の概要のお話がありました。つまり竹原さんは遺跡の発掘ということでまずは材料の提供されたわけですね。で、その後私がその材料を元に料理をしていかなければならない。つまり殿村遺跡がどういう性格の遺跡であるかということを分析をしないといけないという、実は順番になっているわけありますが、これは大変難しい。つまり今出していただいた材料というのは、この材料だけでもですね実は皆さんにご理解いただきたいのは一級の材料なのだということです。鯛の刺身から始まるようにですね、一級の実は材料なわけです。その材料を私が調理に失敗してしまうと食べられなくなってしまうわけで、これはすごく辛いわけなんですが、出していただいた材料を元に今どんなことが考えられるか、これはまだまだ全貌がはっきりしてないわけですし、これからも例えば殿村遺跡の範囲を決めるだけでも大事なことなんですけれども、その全貌がわかり次第またいろんな分析ができると思うんですが、今いただいた材料の中から分析をしていきたいというふうに思っています。で、特にそうなりますと日本列島の中で理解をしていかなくてはならないわけですね、これは単に松本周辺、あるいは信濃の国で理解ができるということではなくて、日本列島の中で考えていかなければならない遺跡であるということは間違いないと思います。そこでみなさんは大変申し訳ないんですが、日本列島全域の遺跡の話をていきますので、すごくなじみが薄いかもしれないんですけども、その点はご理解をいただきたいと思います。

先ほど言いましたように1400年代の石垣なんてほとんどないわけなんですから、まずはこの石垣を分析していかなければなりません。ではなぜ中世に石垣がないのかということで少し時代を遡らせていただきます。日本のお城に一番最初に石垣が築かれるのは7世紀、つまり600年代に九州の方ですね、当時唐と呼ばれていた中国とそれから朝鮮半島に新羅という国がありまして、この唐・新羅が連合して日本に攻めて来るかもしれないということで、当時天智天皇が日本の中で唐・新羅に対して防御するお城を造るわけですね。これが対馬の金田城でありますとか、太宰府の大野城であります。ここには見事に石垣が積ま

れているわけですね。これがおそらく日本一番古い石垣だと思います。これは国家が造る城ですね。律令国家という国が造っています。ところで、私たちが専門にしている戦国時代の城というのは、これは武士が造ります。日本の城というのは面白いですね、貴族とか天皇は絶対に城を造らないんです。中世は武士という武力集団がお城を造ります。また一部でお百姓さんたちが武士の乱暴から自分の村を守るために村人が城を造ったりします。あるいはこの信濃で面白いのは戦国時代に村人が戦を避けて山に立て籠もる山小屋というのを造るわけですね。「山小屋に逃げた」、「山小屋に籠った」という記録が信濃あるいは甲斐の国あたりでは残っていますけれども、古代の城は国家が造ります。律令国家が中国・朝鮮との対外戦を想定して朝鮮式山城を日本の中にいくつか造るわけです。そしてもうひとつ、皆さんにお城というと一番聞きなれてる松本城というような、これは近世のお城となります。織田信長が天正4年（1576）に近江国で安土城という城を造るわけですね。で、この安土城から日本で初めて石垣をもって、天守閣を造って、瓦を葺くというお城になるわけですね。信長がもし安土に城を築いていなかったら、日本のお城というのはああいう形になってないわけですね。例えば武田信玄がもし天下を取ってたら、今の松本城なんというお城は出来上がらなかつたわけです。信玄は最後まで府中、つまり甲斐の躰躅ヶ崎館まで帰るわけですが、あそこは土造りだったわけなんですね。そして今発掘で少し石垣は出ていますけれども、そんなに壮大な石垣を造っていない。基本的には土造りの城なんです。上杉謙信にしてもそうです。あるいは安芸国の毛利氏にても土造りの城しか造っていない。そこで画期的な石垣・天守・金箔瓦の城というのは信長によって造られたわけなんですね。で、以後信長の家来であります秀吉は右へ倣えで大坂城で同じような石垣や天守あるいは金箔瓦の城を造ります。また秀吉の家来たちが全国でそれを展開していくわけなんですね。まさに松本城のもともとの深志城というのはおそらく土で造られていたものが石川数正の段階でですねどんどんバージョンアップしていく、石垣・天守が造られていくという全国的に見られるような近世の城になっていくわけです。ですから近世の城というと石垣が当然あるわけですね。日本のお城の歴史を見ていて大変面白いのは、古代の山城には石垣がある。信長の安土城以降も石垣がある。ところが中世だけは実は石垣を造っていないということがわかるわけです。基本的にはほとんど石垣を使っていないということなんですね。しかしある地域では城郭に石垣が導入されてまいります。1500年代に入りますと石垣をどうも使っていくところがあるんですね。で、この話は後でさせていただきますが、まず皆さんには中世のお城には石垣がないということを知っていただきたいということなんですね。よくこういう話をすると、ああそれじゃ砦みたいなものだったのかとおっしゃいます。しかしそれは砦みたいなものではなくて、全国どこへ行っても土でできます。ですから皆さんのお住まいの例えば虚空蔵山城に石垣がないから砦みたいなものだったということでは決してなくて、戦国時代のお城としてはそれが当たり前の姿だったというふうに思っていただきたいんですね。

私は小学生の頃から城が大好きで、日本列島のお城を見て歩いているわけですね。で、後でも話しますが日本には3万から4万の城跡があるわけです。3万から4万というと1日贅沢に2つ見にいったとしても1万5千日から2万日かかるわけですね。ということは生きている間に私は日本の城が全部見れないというぐらい城を造っているわけです。しかしまあそうは言っても、できるだけ数多く見たいですから、先ほどご紹介がありましたように私は2008年に滋賀県米原市を早期退職しました。で、北海道や、東北の城を見に行ったわけです。ところが山城というのはすでに忘れ去られていますから道がほとんどない。そこで、道を尋ねるわけです。地元の方に例えばここでですね、林城に登るのにどういったらいいんでしょうね、と聞くと大体教えてくださいます。すると、その後かならず、「どっから来られました」とお尋ねになるんで、「滋賀県から来ました」というと、「何しに来られたんですか」と言うんです。「いや、城を見に来ました」というと、必ず言われるのは「何も残っていない」、それから「砦みたいなものです」とおっしゃいます。ところが何も残っていないという、その残っていないというのは、松本城に比べて何

も残っていないというだけあって、実は山城に登りますと見事に曲輪であるとか、土壘であるとか堀切というのが450年経った今でも見事に残っているわけです。それを分析するというのが私たちの研究なんですけれども、何も残っていないということはないわけです。実は松本城の方が残りは悪いのです。つまり松本城では天守以外建物は残っていないわけですね。江戸時代は天守だけではなく、櫓があったり、御殿があったり堀があったり門があったりしたわけですが、それは悉く明治維新によって潰されるわけです。ところが戦国時代のお城というのは土木施設ですから始めから建物なんて考えていないわけです。堀を掘ったり、土を盛ったり、土を削ったりしている土木施設なわけですね。建物なんてのは全く考えていないわけです。ですからほぼ100%当時の土木施設が残っているわけです。それを分析することが山城研究なわけです。で、もうひとつは砦みたいなものだったというのは皆さん松本城クラスの大きさの城と比較して、それより小さい、つまり大小でもって城を分けてしまわていれるのではないかでしょうか。決して小さいから砦ではないわけです。近江に来ていただきますと甲賀郡というところでは1郡で300の城を造っています。どんな城かというとこのホールよりも小さい城です。1辺がおよそ30m四方の四角いお城があるんです。土壘だけを廻しているんです。ひょっとするとみなさんのお宅の方が大きいかもしない。それも実は城なんですね。城と呼ばれています。ですから大小で決して城や砦になるわけではないということです。戦国時代の城はどうも何も残っていないとか、規模が小さいということで砦だというふうに思われてしまいますが、戦国時代のお城というのは、その程度のものがごく普遍的な城だったということを是非ご理解いただきたいですね。決して郷土に残っている戦国時代の城はつまらないものでも、小さいものでも、何も残っていないものでもないということなのです。ですから石垣がないというのは当たり前なんですね。まずこの点をご理解いただきたい。

寺院の石垣

そういう意味ではそれだけでも殿村遺跡の石垣というのはすごい価値があるわけですね。これはまた後にお話しをしますが、もうひとつ今日はサブタイトルで中世の山寺・山城・居館と書かせていただきました。山城と居館に関しては先ほど申し上げましたように詰の城という戦う空間と普段住んでいる空間という二元的空間の中でご理解がいただけると思うんですが、その中にお寺が関わっているというのが何か違和感を持たれるかもしれません。そこで少し山寺のお話をさせていただきたいと思うんですが、私は日本で中世に石垣が出現するのはお城ではなくてお寺から始まると考えています。お寺に古い石垣がよく検出されています。例えば「大きい知る波」と書いて「おちば」と読むのですが、これは静岡県の湖西市というところですね、浜名湖の西側になります。この大知波峠廢寺というのが10世紀の半ば、つまり平安時代ですね、900年代から12世紀の前半、1100年代の始めまであったお寺ですが、ここにお堂の前に平たい石を積んだ石垣が検出されています。ですからお寺のお堂を造る時にその基礎の前に石垣を積むのがどうも9世紀から10世紀くらいにはもう存在したようです。また、愛媛県の等妙寺というお寺で15世紀から16世紀の、福井県の白山平泉寺からも15世紀の石垣が検出されております。あるいは慈照寺、これは銀閣寺といったほうがわかつていただけると思いますが、その銀閣寺の発掘で、室町幕府第8代将軍の足利義政が造った東山山荘時代の石垣が検出されております。これは15世紀ですね。さらに、一番ホットなお話をさせていただきますと、昨年の秋に滋賀県で能仁寺というお寺、これが1401年に



写真2 能仁寺で検出された石垣
(米原市教育委員会『京極家激闘録』2011)

亡くなつた京極高詮^{たかのり}という人の菩提寺ですので、もう15世紀の頭ですね、1401年にできたお寺で、2m 50cmくらいの高さの石垣が検出されています。また、勝持寺、これは京都の洛西にあるお寺なんですが、ここでも15世紀の4mくらいの高い石垣が検出されております。こういう具合にどうも中世のお寺で石垣が集中するのが15世紀くらい、古代にすれども、15世紀ぐらいになると各地のお寺で石垣が築き始められるというふうなことが考えられそうです。こうした石垣は、どのようなものかといいますと、大きなお寺には子供のような小さなお寺が集まるんですね、それを坊院とか坊とか子院と呼んでおりますけど、碁盤の目状に道路があって、その道路脇に石垣が積まれている。その中に坊院がある。それが100、200集まって巨大な寺院を形成している。というのが15世紀くらいになると日本の各地で造営されるわけです。これが実は石垣のルーツだというふうに思っています。

この15世紀ではまだ武家側には石垣を築くような技術をもっていなかったわけですね。その段階でお寺ではこういう具合に石垣を点々と造っていくというのが日本列島の各地で追いかけることができるわけですね。あるいはもっと面白いお話をさせていただきますと、これは私がフィールドとしております滋賀県の事例なんですけども、西国三十三観音を回っておられる方は、観音正寺というお寺はご存じでしょうか。纖山^{きぬがさ}という、おそらく西国三十三観音の中では一番の難所というか、高い山を登らなければならないお寺です。麓からですと1時間少し山を登らなければならないという観音正寺というお寺があるんです。この観音正寺は実は観音寺城というお城と重複しています。観音寺城というのは近江の守護であります六角氏の居城なんですね。南北朝時代に六角氏が立て籠もって、以後そのまま居城にした、それが観音寺城です。そこにはもともと観音正寺という奈良時代くらいからあるお寺があったわけですね。お寺と完全にオーバーラップしているわけです。あるいは上平寺というお寺が伊吹山の麓、つまり滋賀県の一番東北の方にあたる場所なんですが、この上平寺には上平寺城という北近江の守護であります京極氏の居城がありました。あるいは大嶽寺^{おおぎや}というお寺、これは小谷城の一番山頂部、NHKの大河ドラマの主人公江が生まれたお城として有名な小谷城でありますが、この山の一番高いところには大嶽寺という古いお寺があった所なんですね。このように見ていきますと、湖北・湖南の戦国大名や守護大名のいたお城はそれよりも前にお寺のあった所だということがわかってまいります。もう少し視野を広げますと例えば江北にある弥高寺というところは、これは室町時代の記録に江北の守護である京極氏が「弥高寺から出陣した」とか、「弥高寺に陣を張る」と記されていますので、お寺にどうも陣地を構えていたようです。また琵琶湖の西側には国の史跡になっております清水山城という城があるんですが、その清水山城というのはお城のあるところに清水寺というお寺があって、その本堂跡が今でも残っています。これは高島七頭の惣領家越中氏の居城であります。つまり、滋賀県の山寺を調べますと、山寺と守護、あるいは戦国大名の城がオーバーラップしているということがわかつてきました。これもう少し広げていきますとね、全国的にも言えるようです。で、小谷城を例にとってお話をさせていただきますと、またこれから季節も良くなりますし、浅井三姉妹博もやっていますので、是非長浜のほうに来ていただいて、小谷城にも行っていただけたらと思います。今、シャトルバスがあって、ありがたいことにバスで上まで登れます。苦労していただいて、1時間ぐらいかけて山を登っていただく必要もなく、バスで登れますと、この小谷城はですね、ものすごく美しい山の形をしています。三角形の富士山形をしているわけですね。これは湖北という地域に入ればどこからでも見える山なんですね。で、私は城郭を研究しているわけですが、お城というのは基本的には軍事的な防御施設です。戦うために造られた施設です。しかしそれは単に戦うだけではなくて、どうも戦国大名クラスあるいは有力国人クラスになると、よくね、お城の本を読んでもらいますとわかりますが、ここは交通の要衝で、まさに虚空蔵山城で言いますと、東山道が通っていたり、善光寺道が通っている交通の要衝で、ここを押さえると軍事的にも重要な役目を果たす。というような説明がされていますが、果たしてそれだけで虚空蔵山に城を築くのでしょうか。もっと他にもこの近くには山がたくさんあるは



写真3 虚空藏山遠望

戦国大名の居城なんですね。わずか50年なんです。じゃあ浅井亮政は以前どこにいたのかというと、丁野すけまさという村の中に館を構えているだけの小さな土豪でした。それが国人のクーデターによって、守護京極氏を追い出して、守護に代わって戦国大名になった時に、突然その平地の居館から小谷城に移るわけですね。まさにこれは戦国大名浅井氏の独立宣言であるとともに大嶽寺という寺のあった山に籠ることによってさらに威儀を高める。まさに美しい山でありますから、あそこに今度はリーダーとして浅井氏が城を造ったんだということを見せるということを考えていいかと思います。で、そうした近江の山城の状況をお話しさせていただきますと、そうしたものを見えてくるのではないかでしょうか。つまり決して高い山、軍事的に重要な山に籠るのではなく、もともとあった宗教勢力のある山寺にお城を造るということが近江では非常に顕著に認められるわけですが、実はこれをヒントに虚空藏山城を考えることができないだろうか、というふうに私は分析をしてみたのですけどもいかがなものでしょうか。

もうひとつはこれも非常に大事なことなんですが、単にお寺に籠るとか、お寺を利用するというのは宗教権力を利用するだけではなくて、非常に実利的なものがあったんではないか。それは技術であります。近江の観音寺城の場合、大変面白い記録として、「御屋形様惣人の所下の石垣打ち」でありますとか、「御屋形様御石垣打ち」という内容が度々でてくる文書が発見されております。御屋形様というのとはこれは守護のことですね、先ほど言いました近江の守護であります六角氏のことです。六角氏の惣人の所の下の石垣、おそらく山の下の石垣のことです。この観音寺城の構造は先ほど来申し上げております繖山の山城と麓の館から構成されております。ここに記されているのは惣人の所の下の石垣とは山麓部分の居館の石垣のことだと思います。あるいはもうひとつ御屋形様の御石垣打ちというのとは山城のことなんです。これがね、『下倉米銭下用帳』という金剛輪寺というお寺が持っている文書の弘治2年（1556）の記録に出てくる一節なんですね。安土城が築かれる20年前のことです。この『下倉米銭下用帳』というのは簡単にいようとお寺の会計簿のことなんです。いろんな人がやってきていろんな会議をした時にどれくらいお米を出したかとか、どれくらいお酒を出したかといったことが書いてあります。で、御屋形様惣人のところの下の石垣打ちと書いてありますが、この前段に酒何斗、米何升と書いてあるわけです。さらに付け加えますとこのために六角氏の重臣であります三上氏の使者として、「三上殿御使者谷十介」がやってきて金剛輪寺の「西座の衆と談合」と書いてあります。談合といえば今の官製談合の談合を連想されますが、ここでは会議のことです。その内容が、御屋形様の石垣を造る会議であったわけです。その時にお米が何升いって、酒が何升いったということが書かれているわけです。つまり観音寺城のことは、日本では有数の石垣を伴う山城です。安土城に先行する数少ない石垣の城なんですが、どうもこの石垣を造ったのはこの文書を見る限り、金剛輪寺の西座という所へ行って会議をして造っているようなんですね。つまり六角氏側

ずですね。私は小谷城を見ていつも思うのですけども、小谷城の場合も戦国大名であります浅井氏が他の山に城を築いてもいいような山はいくつもあるわけなんです。なぜ小谷山にこだわったのか、やはりこれは非常に象徴的な山だったからだと思います。虚空藏山もおそらく古代以来の信仰の山であり、その信仰の山に城を造ることによって、きわめて象徴性の高い城の造り方をしていたんだろうということが言えるのではないですか。

実は小谷城というのとは浅井氏3代とい

すけまさ よう

には石を割って積む技術がないので、石垣の城を造る時に寺院の技術を援用したということが読み込めそうです。ちなみに私は西座というものがわからなかったんですね。これをもう十数年前にお寺のご住職とお話をすると機会があって、「西座というのはだいたい何なんでしょうね」と聞いたら、即座にご住職が、「西座というのはお寺の普請をする連中の住んでたとこや」とおっしゃいました。お寺の普請というのは数百もある坊院の石垣の修理をしたり、五輪塔を刻んだり、それから側溝を造ったりという、石を使いながら土木工事をしていた人々の住んでいた場所だったようです。

そこで談合してるのはまさに観音寺城の石垣は六角氏がお城の石垣を造る時に、この金剛輪寺の技術を援用したというふうに考えていいかと思います。ですからお寺とお城というのは、実は非常につながりが深いということがわかります。本日の講演のサブタイトルであります山寺・山城・居館というのは皆さんには違和感があったかもしれません、私はお寺の持つ宗教的な力プラスこういった技術的なものというものが武家権力の中にどんどん取り入れられていくというのがどうも15世紀になって繰り広げられるのではないかという風に考えているわけなんですね。



写真4 観音寺城の石垣

石垣の導入

では次に虚空蔵山城や殿村遺跡を理解するために、今度は中世の山城について少し見ておきたいと思います。実は中世というのは大築城時代であります。先ほど申し上げましたように、1300年代から1600年の300年間の間に日本列島の中には3万から4万もの城が造られているわけですね。もうこの旧四賀村の中にもいくつも城が築かれているわけです。長野県内でも800近くの城跡が存在するわけですね。日本の中世は大築城時代なのです。それでは日本の中でそんなに戦をしていたのでしょうか。城は軍事的な防衛施設ではありますが、3万から4万ある城跡の中で実際にそこで戦いが繰り広げられたことがある城というのはおそらく1割くらいのようですね。残りの9割は1度も戦うことなく江戸時代を迎えて廃城になっています。で、実はこの中世のお城というのは、何度も申し上げますが土からできている、土木施設なのです。決して天守閣を造ったり、漆喰の壁で櫓を造るような城ではありません。山の木を切って、その切った木で柵を造ったり、農作業小屋程度の掘立小屋を造って休憩施設を造ってるという程度なわけです。さらに景観的には、今、虚空蔵山は全部木で覆われているわけですけども、おそらく中世には山頂部には木が全くなかったと考えられます。お城として堀切や曲輪のあったところは木がないわけですね、木があったら攻めて来る敵は木に隠れますから、弓矢、鉄砲を撃てません。ですから木は切っているわけです。それから少し南に出っ張った尾根に秋吉砦や、中の陣が築かれておりますが、あの部分もまた木がないわけですね、そういう少し赤茶けた部分があったというふうに思ってください。今の姿は廃城になった後に木がいっぱい生えてしまった風景なんです。例えば古墳も今はこんもりとした森になっていますが、築かれた時は葺石という石だけで木が全く生えていなかったのと一緒にです。お城も一切木は生えていない。そういう風景がこのあたりにもあったわけです。

その土木施設であった土造りの城がどうも16世紀の前半くらい、1500年代の始めくらいから、ある地



写真5 中の陣城の石垣



写真6 中の陣城と秋吉砦間の平場の石垣



写真7 桐原城の石垣

域でひとつのうねりが起こってまいります。石垣を造るということです。先ほど、日本のお城では安土城以降石垣の城になると言いましたけども、安土に先行して数少ない地域でいくつか石垣を城に導入している地域があるわけですね。それはどのあたりかと言いますと、まずこの松本周辺です。ここは本当に珍しい地域です。松本周辺には扁平な石材を垂直に積む石垣の認められるお城がいくつか見受けられます。これは私自身は桐原城でありますとか、この虚空蔵山の中の陣、あるいは昨日行きました中の陣の横に展開していく平場などで確認しています。その石材は扁平なんです。厚さは10cmから15cmですかね、薄い扁平の石を積み上げていく。しかも皆さん松本城に行っていただいたらわかると思うのですが、石垣というのは全部勾配があるんですね、45度から50度くらいの、勾配があるんです。ところが中の陣や桐原城へ行くとほぼ90度近くに石垣を立てているんですね。だから扁平の石を垂直に立てるというのがこの松本周辺の特徴といえそうです。ここが大事です。古い石垣ほど、石垣の法面というものは緩やかというイメージを持たれていないでしょうか。新しい城の石垣ほどキュッとこう立ち上がるんですね、天端3分の1くらいに反りを設けるようになるのですが、実は15世紀に築かれる石垣はほぼ垂直に積んでいます。古い石垣ほど実はまっすぐに積んでるんですね。そういう意味ではこの松本周辺の石垣というのは非常に古い積み方を継承しているようです。私は中の陣や秋吉砦の石垣は15世紀のものではなくて、これはもう16世紀に入ってから、しかも16世紀でもひょっとすると半ばくらいのものではないかと思っているんですが、それが15世紀と同じように垂直な積み方をしている、これは大変注目してもいいと思います。

それから美濃国ですね。岐阜県であります。岐阜県では美濃の守護所であります大桑城などでやはり

垂直に積む石垣が検出されています。それからもうひとつは近江ですね。近江は江南、つまり南の方、先ほど言いました、観音寺城を居城としている六角氏の石垣の積み方、これは金剛輪寺の積み方なんですね。お寺の積み方です。それから観音寺城以外では佐生城ですね、あるいは三雲城それから小堤城山城ですか、点々と石垣の積まれた城が見つかっています。それとは別に近江の北の方、つまり浅井氏の勢力範囲で小谷城だとか、それから鎌刃城というお城で石垣が見つかっています。この鎌刃城というのは聞きなれないお城だと思いますが、現在、国の史跡になっています。平成17年に国指定で史跡になりました。この城跡を私は平成10年から平成14年まで5年間発掘調査の担当をしていました。私がここを発掘をするまで全部石垣が埋もれていきました。土しか見えなかったものですから土の城だと思って、発掘をすると土の中から垂直に積んだ石垣が出てきたわけですね。しかも大変面白かったのは、70～80cmくらいの割と大きな石を垂直に4m積んでいるのですが、もう隙間だらけなんですね。で、こうした隙間は松本城なんかに行きますと、間詰石という小さい石を詰めるんですが、鎌刃城で面白かったのは隙間にね、粘土が詰めてあるんです。接着剤として粘土を入れているんですね。それは掘っていた人間が一番わかるんですが、埋もれていた土と全く違って、石と石の間に入っている土は物凄く固い粘土が入っていました。だからどうも積みながら接着剤として粘土を詰め込んでいる、そういう石垣もあるんです。つまり松本周辺では扁平な石を垂直に積み上げるというこの辺りの積み方なんです。それから今私が申し上げましたように、浅井氏はどうも石と石の間の隙間に石を詰めるのではなくて、粘土を詰めることによって崩落を防いでいたような積み方なんですね。ですから各地でそれぞれが石垣を導入し始めるのですが、それぞれの地域の特徴みたいなものがあったわけです。それが天正4年に信長が安土城を築くと全て頭打ちされてしまって、あの扁平で垂直に積むという松本の特徴的な石垣は日本ではなくなります。松本城に残っている今の石垣は近畿地方の織田信長や豊臣秀吉の段階くらいの石垣の積み方と同じなんです。ところが戦国時代では松本だけの積み方であるとか、北近江だけの独自な積み方というのがそれぞれの地域でがんばりながら出て来ているわけですね。

続いて少し話を進めますと、その北近江の次は西播磨、兵庫県の西の方ですね、相生とか加古川で宇喜多直家、この人は備前の戦国大名なんですがどんどん播磨までやってきます。この宇喜多氏によってどうも感状山城などが、石垣の城になっていくようです。当然宇喜多氏の本拠地であります東備前、今の岡山周辺では天神山城だとか富田松山城というところで石垣が導入されています。それからもうひとつは北部九州ですね、北九州でど



写真8 鎌刃城の石垣



写真9 勝尾城の石垣

うも大内氏、つまり山口県にいた守護大名の大内氏が九州に攻め込むわけです。その九州に攻めにいった時に造った高祖城なんかで石垣が見つかっています。この高祖城の石垣も実は扁平に築いています。扁平の石を垂直に築いているので、割と松本なんかに似ている積み方なんですね。それからもうひとつは筑紫氏という戦国大名が勝尾城、佐賀県の鳥栖というところに築いたお城に石垣が導入されております。つまり日本列島全域の中で、繰り返しますと信濃、特に松本周辺と限定していいかと思いますが、信濃・美濃・南近江・北近江・西播磨・東備前・北部九州あたりで16世紀の初めに石垣が導入されているんです。お城に石垣が使われ始めるわけです。15世紀くらいに、お寺で石垣が出来上がり、それをどうも16世紀になると各地の戦国武将たちがその技術を援用しながら自らのお城に石垣を導入していくという流れが見えきそうなんですね。

これが信長によって全国普遍的な石垣になっていくわけです。そして、その山城にはもちろん人は住みません。さっき言いましたようにこれは戦うための場でありますから住まないわけですね。私がよく山城を案内すると、皆さん一番先に聞かれる質問というのはですね、「井戸はどこにあったのですか」「いえ井戸はないんです」「井戸がなかったらこんなとこに住めないじゃないですか」「いやだから住まないから井戸はいらないんです」「え、住まないんですか」というふうにびっくりされるんです。普段は館に住んでいますから水なんか必要ないわけです。では、籠城する時はどうするのか。籠城する時は下から足軽・雑兵が水を持って上がっていいんです。日本の合戦の中で、1年も2年も籠城するなんてことはあり得ないです。大体籠城戦というのは1日から2日で終わります。例えば小谷城が元亀元年から元亀4年（天正元年）まで3年間籠城していますが、決して小谷城が孤立していたわけではありません。付近の村はまだ全部浅井領ですからお米も取れますし、水もいくらでも運べるわけです。しかし最後に信長軍が小谷城の際まで来た時はわずか2日で落城するわけですね。ですから山上に井戸は別に必要がないわけです。さらに虚空蔵山で言いますと、ここはいくらも水の湧いてる場所がありますから、下から水を汲み上げることもないわけですね。

館と寺院

では、山麓の館はどんな形をしてるのかということで、実はここからが特に殿村遺跡を理解するためのお話になりますが、中世の武士の館というのは、四角い堀に囲まれているというイメージなんですね。それを方形館と呼んでおります。しかし今、日本全国で四角く囲まれている中世の遺跡というのはたくさん出てきています。みんなそれをね、館だと思ってしまうんです。これは殿村遺跡の石垣もそうです。

図1をご覧ください。宝積寺館という館の遺構の平面図です。新潟県の新発田市にある館ですね。これは発掘するまで全くわかりませんでした。ですからここが館の跡であるとか、○○氏の居館であったと伝える記録はなかったわけです。さて、図1に上方から左の方にL字状に溝が廻っているのがわかつていただけだと思います。碁盤の目状は、ひとつの目盛が15mあります。この上方から左の方にL字状に折れ曲がった溝なんですが、深さが3mくらい

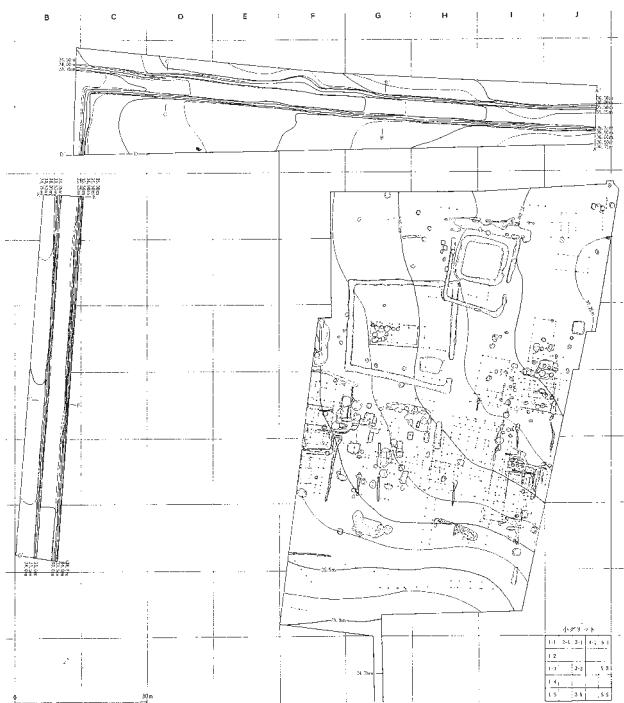


図1 宝積寺館跡遺構平面図
(新発田市教育委員会『三光館跡・宝積寺館跡』1990)

いで、これを延長していきますと 200 m四方になります。200 m四方の堀に囲まれているなんていうのは戦国時代でいいますと、守護の館でもほとんどないわけです。おおよそ武士の屋敷というは暗黙のルールがありまして、守護クラスで 100 m四方、つまり 1町四方、ちょっと大きな守護、大内氏とか大友氏とかそういった守護が 160 mくらい。200 mなんていうのはあり得ないんですね。この宝積寺館は 200 m四方もあるんです。しかも名前も記録に残らないような人の屋敷です。そこまで、武士の館ではないと考えなければならないですね。ここは武士の館とは考えられません。方形館の規模としては、100 m四方が守護クラス、50 m四方が国人クラス、50 mから 30 mクラスが大体在地の土豪クラスというふうに思っていただいたらいいと思います。200 mということはあり得ないんですね。で、この図面の右の方に発掘をした調査区が書いてありますが、この調査区の中にいくつか溝で囲まれた四角い場所があります。これは墳墓堂を巡る溝だと考えられます。墳墓堂というのは、中世のお墓を覆ってたお堂です。鞘堂とかあるいは近世の大名でいうと御靈屋というような言い方をするものです。中世のお墓には五輪塔とか宝篋印塔があるんですが、露天に建てられており雨に濡れますから濡れ墓といいます。で、もう少し位の高い人物の墓になりますと濡れ墓ではいけないということでね、鞘堂といいますか、覆い屋をお墓の上に建てます。それを墳墓堂とかあるいは鞘堂と呼んでいます。まさにこの方形区画はそういう墳墓堂のような場所です。図1のもう少し下の方を見ていただくと小さな四角いものがいっぱい書いてあります。こういう小さい四角いものは土坑墓と呼ばれる墓穴です。骨片がいっぱい出てきたり、それから板碑などが出ています

から墓地ですね。四角く囲まれている方形区画は武士の館だという先入観から宝積寺館という名前がつけられてしまったのですが、検出された遺構を詳細に分析しますとおそらくこれはお堀に囲まれたお寺で間違いないと思います。これがその宝積寺館という方形区画

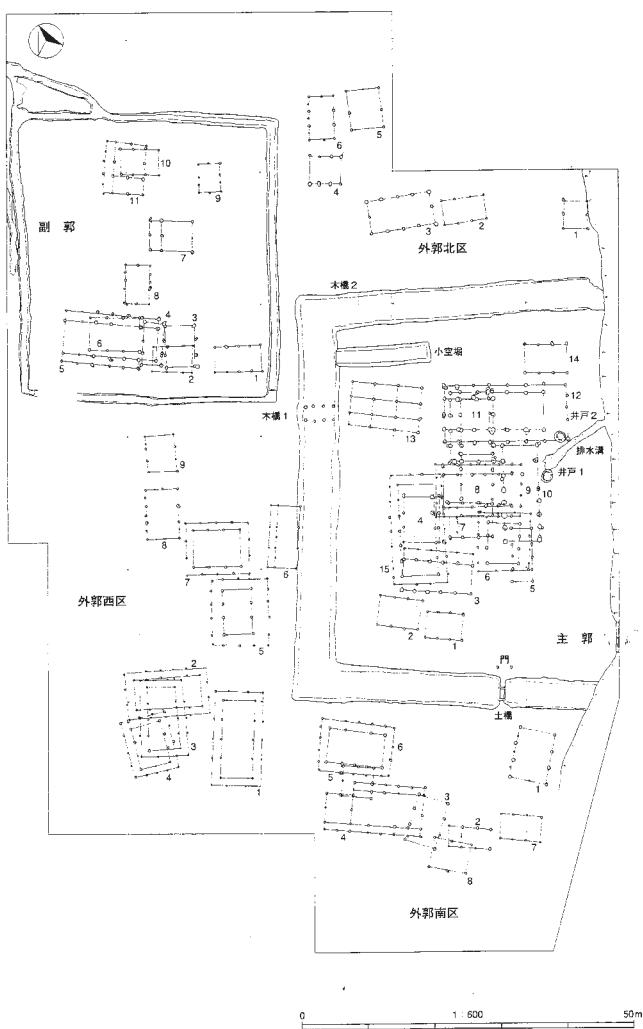


図2 伊達八幡館跡遺構平面図

(十日町市教育委員会『伊達八幡館跡発掘調査報告書』
2005)

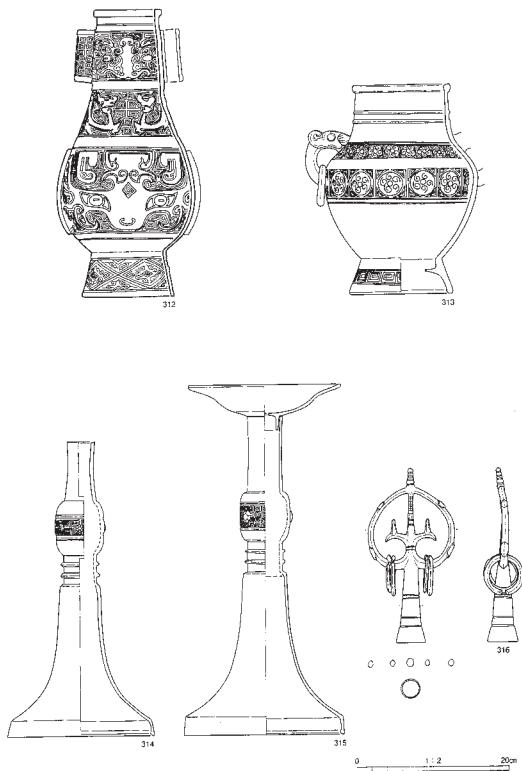


図3 伊達八幡館跡出土仏具実測図

(十日町市教育委員会『伊達八幡館跡発掘調査
報告書』2005)

の本当の姿だろうというふうに思っています。

次に図2を見ていただきますと、伊達八幡館跡という遺跡です。これは新潟県十日町市にある遺跡なんですね。ここも図の右の方をみていただきますとね、主郭と副郭と書いて堀に囲まれた2つの方形区画の中に建物がいっぱい建っているというのが見てとれると思います。ここもどうも発掘当初は堀に囲まれた館で、伝承はないのだけれども、武士の館というセンセーショナルな発表がありました。主郭が南北65m、東西50mのほぼ半町四方の規模です。副郭という小さい方が南北45m、東西40mで半町にちょっと小さいくらいの規模の2つの堀囲いになっている遺跡です。ところで、図3を見ていただきますとびっくりするような遺物が出てているんですね。図3は、銅製の花瓶、つまり花活けですね、上の2点、もうなんか中国っぽい文様が入った、これ花活けですね。これが2点。それから、下の左2点は燭台、つまりローソク立てで、右の1個が錫杖です。つまりお寺に関わるような遺物なんです。当時武士の館では燭台はまず使わないんです。灯明皿という素焼きの器に灯芯という紐を入れて、それに火を灯す、そんなローソク立てなんていうのは使わない。ただここは一方では武士の館の中にあった持仏堂という、館の中にセットで

あったお堂の中で使われていたものだという説もありますが、図2の方に戻っていただきますと主郭と書いてある中心の建物は、何回か建て替えをしているのですが、大変面白いのは、8番と書いてある中心の建物とその後ろに11番と書いてある建物、これが実は回廊という廊下で結ばれています。これは本堂とその前にある、どうもお堂が2つ、いわゆる開山堂とか祖師堂と本堂がセットになっていたというような建物ではないかと思っています。やはりお寺の形をしているんですね。加えて出土した遺物がこういった非常に宗教色の強いものであるということで、この伊達八幡館も私は実はお寺ではないかというふうに考えています。

堀に囲まれたのが館だというのはイメージ論に過ぎないわけでして、実は堀に囲まれたお寺もあるのです。また、大阪の堺で、日置荘遺跡を発掘した時に見事な土塁で囲まれた武士の館が出てまいりました。ところがすぐその横に同じ大きさの、40m四方くらいの堀で囲まれて、堀の中に瓦が大量に投棄された遺跡が見つかっています。当時瓦を使うのはお寺だけなんです。だから領主の館があり、その横にはおそらく領主主導型の菩提寺と言つていいのかもしれません、領主が主導して建立したお寺が堀に囲まれてあったということなんですね。だから決して、堀に囲まれているのは武士の館だけではなくて、お寺もそういった構造であったというのを是非ご理解いただければと思います。つまり山城の麓には武士の館があるだけではなく、その武士が主導で造ったお寺があったり、神社があったり、あるいは被官と呼ばれる家臣たちの屋敷も点在してたとい

うのが中世的な山城の下にあるムラのあり方というふうに考えられます。

次にこうした全国的な事例から殿村遺跡の性格を考え

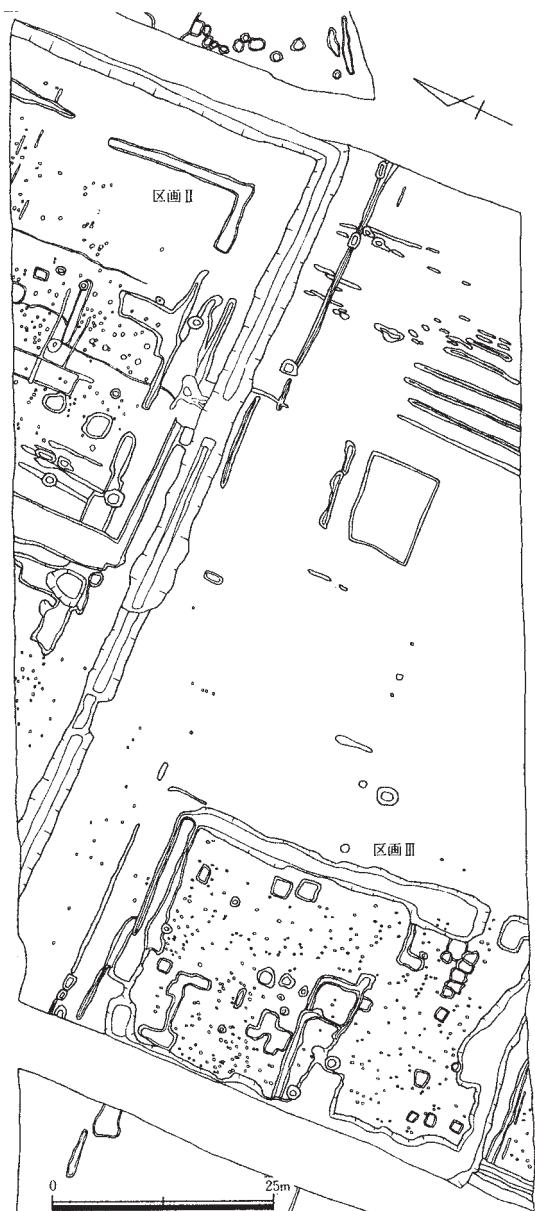


図4 日置荘遺跡で検出された居館跡（左：区画II）と寺院跡（右下：区画III）
(財・大阪府文化財センター『日置荘遺跡（その2）』
1988)

てみたいと思います。今、全国的に山寺にはこういう事例があるとか、お城ではこういう事例がある、居館にはこういう事例があるという話をさせていただきました。さあ問題は殿村遺跡を理解するためには、まず殿村遺跡という小さな遺跡だけではなく、広く会田全体を振り返ってこの、知見寺沢あるいは岩井堂沢一帯で考えるということが重要です。さらに、その奥には虚空蔵山という山があるということで、もうまさにこのホールから道を隔てたあの谷の部分といいますか、扇状地帯のところに殿村遺跡を考えるヒントが全部隠されてるんだというふうに言ってもいいと思います。それは旧善光寺街道が通り、それから、廣田寺や長安寺。この長安寺というのは驚くべきお寺ですね。鎌倉時代に創建されてその始祖であります大覚禪師の木像がですね、今この支所に置かれています。私は委員会で始めて寄せていただいた時にびっくりしたんですね。今は無住でこちらに置かれているということですけれども、鎌倉以来あそこに禅寺があったのです。これだけでもこの殿村遺跡を考える上では重要なことだろうと思います。あるいは殿村遺跡のすぐ麓には補陀寺というお寺の小字が残っていて、そこにも明治の廃仏毀釈までお寺があったわけですね。ここのご本尊が室町時代の仏様で、今神宮寺にありますよという話をさっき聞いてですね、大変驚きました。さらには無量寺。この沢だけですね、中世に遡るお寺が4つ、5つある。というのは注目していいかと思います。もうひ



写真 10 大覺禪師像

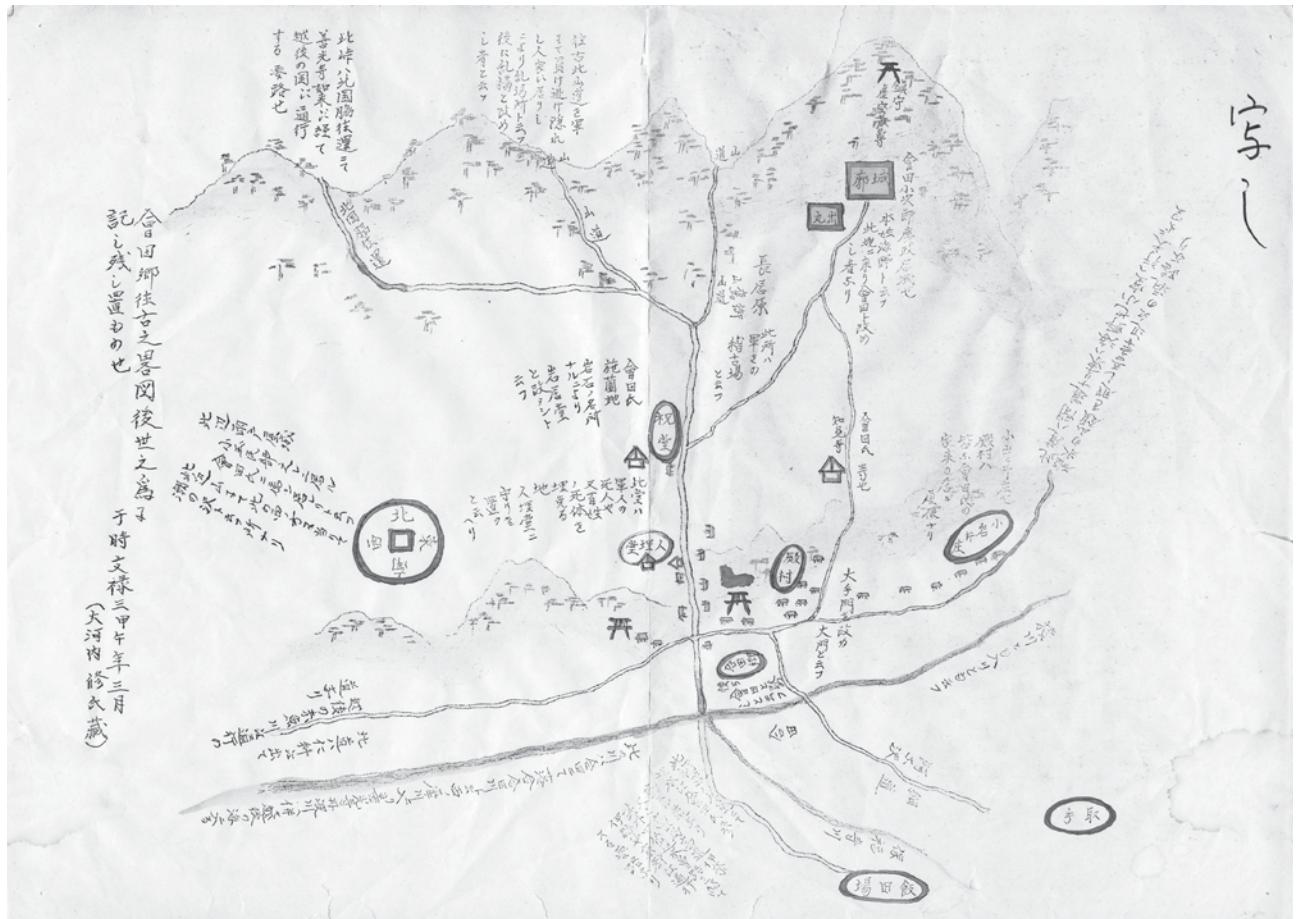


写真 11 文禄三年絵図

とつ面白いのはこの虚空蔵山を中心とした絵図の中で、文禄3年の絵図の写しというものがあります。昨日私は寝る前にもう1回予習をしながらその絵図を見て気がついたのですけれども、虚空蔵山の山を描いているところに、山の頂上に城跡が描かれておりません。山の頂は、「鎮守虚空蔵尊」と書かれています。虚空蔵尊という仏様のいる場所なんですね。お城はその下の方に「城郭」と書いてあるところと「出丸」と、2つ記してあるんですね。「城郭」と書いてある方を本体とするならば、「出丸」と書いてある位置がどうも中の陣に見えて仕方ないんです。つまり西側にある方が出丸でこれは中の陣に見えてしまう。そうだとすればこの文禄3年の絵図に書かれている城郭というのは、昨日見に行きました谷の平坦地をどうも城郭と意識していたのではないでしょうか。虚空蔵山城の新しい見方ができそうです。普通のお城は尾根筋に造ります。ところが、どうもこの虚空蔵山城の場合は尾根筋に中の陣、それからもうひとつの尾根筋に秋吉砦を築いているのですが、その間の水の手と呼ばれるところに何段かの平坦地があるんです。これは是非皆さん見に行ってください。そこを「城郭」と書いているのではないだろうかと、昨日絵図を見ながら思えてきました。これは非常に面白い城の造り方をしています。しかもその段を全部石垣で築いているんです。昨日見せていただいただけで単純に上から数えただけで5段くらい石垣にしています。これはもう16世紀だとしてもですね非常に早い段階で石垣がこの虚空蔵山城に取り込まれたということがわかります。これは大変面白かったです。あるいは昨年案内をしていただきました長居原という、山麓部分にも驚いたんですが、車ですぐ近くまで入れるんですね。人跡未踏の山の中に埋もれていたから今まで知られていなかつた驚きがあるんですが、軽のワゴン車で入ったところに延々と石壙があるんですね。どうも当初



写真12 長居原の石壙

は私もこんなところにそんなものがあるのかというので疑いを持って、猪垣かなつかではないかと思ったんですね。ところが石壙と石壙の間には門の跡らしい開口部があり、口が開いているんです。だからこれはひょっとすると坊跡かもしれません。虚空蔵山の山麓に展開している宗教施設の痕跡が残っているかもしれません。ということで、これも含めて考える価値のあるものが長居原の石壙というふうに思っています。

そういうことで単にこの殿村遺跡が殿村遺跡だけでは理解できない、鎌倉以来のお寺であるとか、虚空蔵山城であると

か、それから新たに発見された長居原の石壙などを含めて全体を考えていくことが重要です。この会田の谷の中に中世がそのままパックされて残っている、そういうイメージがするわけです。その中で殿村遺跡をどう考えるかということです。まず最初に私の聞いた情報は、殿村遺跡という会田氏の館跡で15世紀の石垣が出た、ということですね。で、見に行った時も当初は館という印象がずっとあったんです。ところが例えば、今度は図5をご覧ください。これは館・寺・山城を理解するために、この殿村遺跡と同じような立地条件で、同じような遺跡のあることを紹介するために作成したものです。これは広島県にあります万徳院というお寺の平面図です。この万徳院というのは吉川元春の館のすぐ横にある元春の菩提寺です。きつかわ一番下に石垣の立面図を載せています。これ、殿村遺跡に似てると思いませんか。段の高さは数mに及ぶものではなくて数段の石垣です。で、大きな石が点々と入っています。これは安芸の国の典型的な石積みなのですが、縦石を置いてその横に石を置いてまた縦石を置いてその横に石を置くという構造が

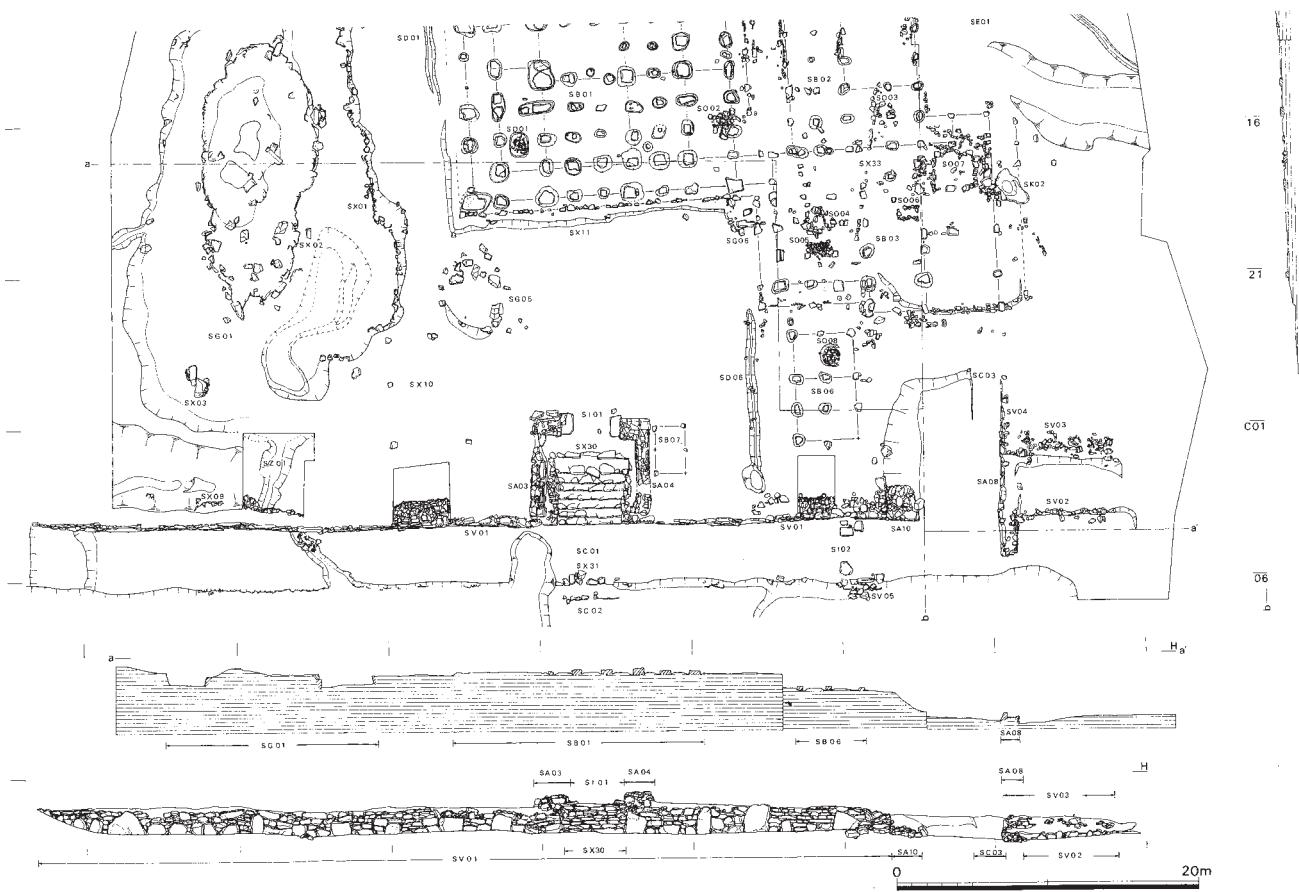


図5 万徳院跡遺構平面図（広島県教育委員会『万徳院－第3次発掘調査概要一』1993）

この図面からわかつていただけだと思います。これは安芸の国の「石つきのもの共」と呼ばれる石工集団によって造られた石垣ですけれども、真中がちょうど門になっているわけですね。今度上方の図を見ていただきますと、ちょうどその石垣の真中くらいが階段になって、門の真正面が本堂になるわけですね。本堂に対して左側に庭があります。庭園ですね。おそらく右側が庫裏に相当する居住施設ですね。万徳院は谷部分に造っているお寺なんですが前だけに石垣を組んだお寺があるわけですね。こうした事例は今後殿



写真13 万徳院の石垣

村遺跡を考える上で重要だろうと考えます。しかもこの万徳院にはすぐ近くに吉川元春の館跡や小倉山城という居城があるわけです。まさに虚空蔵山城と殿村遺跡とその前にある寺がセットになるようですね、中世的景観をこの吉川城館跡群は持てるわけです。つまり日本に点々とこうした中世の村造りというか、領主主導型の村造りというのが行われていたということがわかるわけです。

もうひとつ事例をご紹介したいと思うんですが、図6をご覧ください。これは、滋賀県の東近江市にある高野館遺跡の遺構平面図です。この館はどのようなものかというと、織田信長の側室にお鍋の方という女性がいるんですね。そのお鍋はここ出身なんですね。小倉実澄の末亡人から信長の側室になったんです

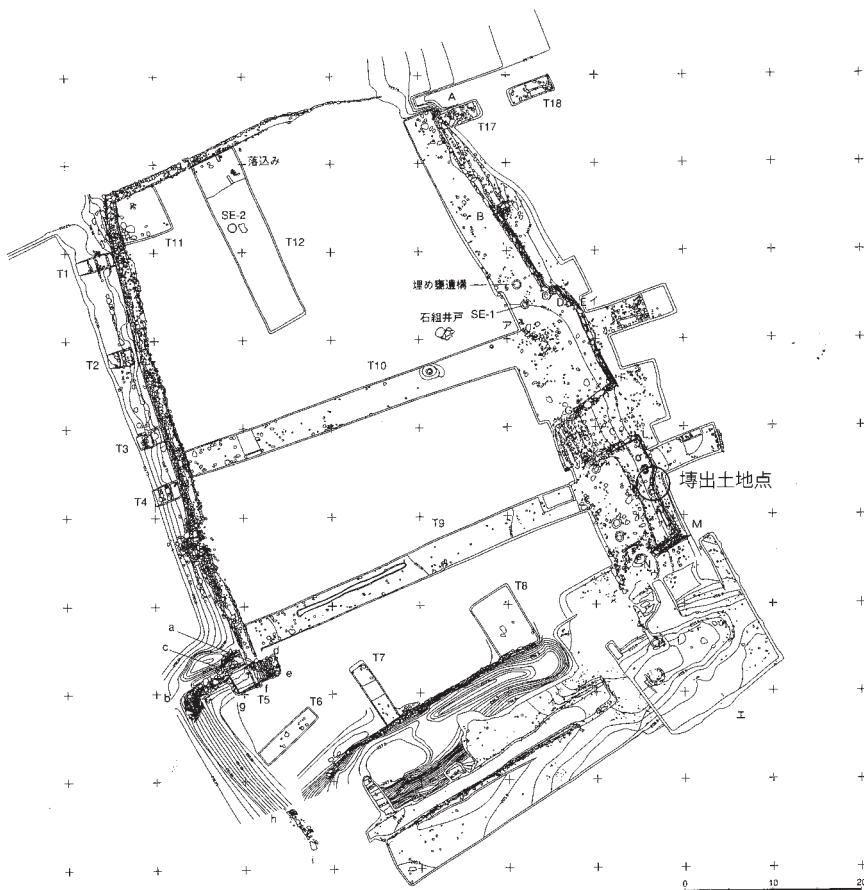


図6 高野館遺跡遺構平面図
(東近江市教育委員会『高野遺跡・高野館遺跡』2010)



写真14 高野館遺跡の調査区全景

土へんに専門の専と書いて「せん」と読みますけど、「壇出土地点」と書いてある所がわかりますでしょうか？ここが壇出土地点、実は壇貼りなんですね、壇とはどのようなものかといいますと、瓦でできたタイルといいますか、レンガみたいなものです。禅寺に行くと法堂とか開山堂の床に、四角い瓦が敷いてあります。あれが壇なんですね。つまりこんなものは武士の館には絶対に使わない。つまり壇が出た段階で、高野館はお寺なんだなというイメージがしたわけなんです。仏堂にしか使わない壇が出土したわけですね。ですからこの高野館遺跡も、館とともに造られた領主主導型のお寺の跡だというふうに考えているわけで

が、そのお鍋の方が秀吉から所領2千石をもらって隠居したんです。その高野の館というのがこの辺にあるということで、実はここは高野館という名前のある地番なんですが、お鍋の方の時代ではなく、もう少し古い時代のもの、ですから遺跡の名前が非常に誤解をあたえてしまうのですが、その資料を見ていただきますと、左側に1段石垣があります。それから真中に1段の段があって右側にもう1段石垣があって、さらに上にも右側に上段の部分があります。で、写真14は高野館遺跡の石垣の写真です。これも殿村遺跡に似てると思いませんか？しかもこれも正面だけつまり前だけを石垣にしております。さらに面白いのは少し図の情報を見直していただきますと、ちょうどね、この右側の石垣の少し下の部分に階段みたいに出っ張っているところがあるんですがわかりますでしょうか？ちょっとこのコの字状に石垣が出っ張っているところ、これ実はスロープになっている石段なんですね、ですから下の段から上の段に上がっていく石段がここで検出されています。まさに先ほどの万徳院と一緒にですね。石垣の真中くらいから階段をたどっていくと、石段の右側の下に

す。これも殿村遺跡を知る上では非常に類似性のある遺跡だというふうに思っています。このように寺・館・山城を考えていくと殿村遺跡の性格というのがわかつてくるのではないかでしょうか。

おわりに

さて残り時間でまとめてみると、殿村遺跡は15世紀に造られた、会田氏の虚空蔵山城に伴う館などではなくて、その館の近辺にあった会田氏の主導によって造られた菩提寺のようなお寺ではないか、というふうに考えられるのではないかと思っています。先ほどの伊達八幡館のように仏具が出ているわけではないので、まだ遺物からの根拠は薄いと思います。ただ、斎串^{いぐし}というような、祭祀に使う遺物が出土しているという事実から、やはり宗教的な施設の可能性が高いだろうと思うのです。虚空蔵山の山麓にあって石垣があるからという短絡的なイメージ論で武士の館だというふうに考えるのではなく、今各地で検出されている宗教施設、つまりお寺の跡であるとか、武士の館であるとかを総合的に判断しながら殿村遺跡を考えていかなければなりません。つまり様々な可能性を考えること、これが大事なんだろうなと思っています。そして特に石垣が、15世紀であるということがまず動かないということになれば、日本でも最古級の石垣なんですね。そのルーツは何かというとこれまでお話ししてきましたように、どうもこれは虚空蔵山を中心とした宗教側が持っていた技術を使っているのではないか、さらにそういったものが15世紀すでに出来上がったからこそ松本の周辺には16世紀の段階で山城にも石垣が導入されていったのではないかということですね。ですから昨日なんかも中の陣やその横に展開している郭群の切岸面にあった石垣を見たらですね、「あ、殿村遺跡が15世紀にすでに石垣を導入しているからここに16世紀の石垣があって全くおかしくない。このあたりのお城に石垣のあるのは、まさに殿村遺跡がそのルーツになるんではないか。」というふうに考えられる石垣なんですね。ですから非常に重要であることは認識をしていただいたらいいかと思います。もう最後の最後になりますが、どうも私たちは石垣というと、織田信長の安土城以降の石垣のイメージがあるので、皆さん方の中にも殿村遺跡のね、現地説明会を聞きに行かれて、ああこんなちっぽけなものかと、松本城に比べたら小さいものだというふうに思われたかもしれません。しかし、そうではなくて15世紀での石垣は日本の中でもまだ数例しかないという非常に重要な石垣であるということをご理解願いたいわけですね。そして、この会田という地域に何度も言いますけど、山城があり、おそらくは寺院だと思うのですが、殿村遺跡があり、さらにいくつかの禅宗のお寺があつたりするという、この景観はまさに中世を考える上では非常に重要なところだというふうに思われます。

最後の最後になりますが本当に大きな評価をしたいのは、よくぞこれを残してくれたということなんですね。ここがすごく大事です。松本市の大英断といいますか、後世に残し伝えてくれることの意義というものを考えたいわけですね。私ももちろん考古学を研究している人間で、滋賀県米原市でずっと発掘をやってきた人間なんですが、普通我々が発掘する遺跡は宅地造成や道路や学校建設で潰れてしまうわけなんですね。しかし潰してしまったら二度と蘇らないわけです。それをこの合併の後の、しかも統合小学校を造るというところの候補地で調査した遺跡を、普通はもう残せないというところをよくぞ残して下さったということですね。学校は場所を変えればそれこそ通学で遠くなるとかいろんなそれぞれ個人のハンデが出て来るかもしれません、学校は移すことによって建てるることはできますが、遺跡は移すわけにいかないんです。その場所にあることが大事なんですね。それを残すことの意義はすごい重要だったと思います。そういう意味では本当にこれは大英断であったと思います。ただ問題は残すだけではなくって、今後はこれをどう整備して、どう活用していくかということなんですね。単に貴重なものが出土した、我々それを研究する人間には重要かもしれないけれども、地元の人にとってそれがどんなに重要なのかということをまずお知らせしなければならないし、石垣を見れるような状態にし、しかも遺跡公園として地域の人が地域学習の場として活用できるところまで責任をもってやっていかなければならないということです

ね。で、そのためには地元の方に殿村遺跡の重要性をまず理解していただくことが大切だと思います。で、私自身の話でどれだけ皆さんに殿村遺跡の重要性をお伝えできたかははなはだ疑問ですけど、とりあえずはですねもう日本でも15世紀の石垣というものが10ヶ所くらいだということを知っていただいて、今後松本市が行っていく調査や、それから保存・整備に皆さんも是非協力していただいて、地域の方がまずは盛り上げていただくことが一番大事だと思いますので、少し今日の私の話で、山城って面白そうだなとか、中の陣にそんな石垣があれば見にいこうかとか、長居原にそんな石垣があるんだったら見に行こうと思っていただけましたら、今が一番いい季節です。木々が全部枯れて山が歩きやすい季節です。これ以上時間がたつと新芽が出てきたり熊が出てきたりしますので、今が一番いい季節です。明日にでも行っていたら見事な石垣を見ていただくことができると思います。私がどれだけ殿村遺跡の性格を今日お話しできたかははなはだ疑問ではあります、これをきっかけにさらなる殿村遺跡の解明に少しでもお役に立てたら良かったのかなあというふうに思います。大変雑駁な話で長時間お付き合いいただきましたけれどもひとまず時間がまいりましたので私の話はこれで終わらせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。

質疑応答

(質問者) 今回発掘調査をした所が寺院の跡だとおっしゃるならば、居館跡はどのあたりにあると先生はお考えでしょうか。

(講師) それは大変難しいご質問です。まず岩井堂沢の地形では四角く堀で囲んだ、いわゆる方形館という構造は無理なのではないかというふうに思っております。ですからやはり1段テラスがあって、その前面は石垣で固めているのかもしれません。これから松本市の教育委員会がですね、校舎と校舎の間の狭いところにトレーナー入れたりされていますので、まあまではこの辺にいくつかそういう試掘のトレーナーを入れながらですね、また石垣が出てくる可能性があるかもしれないというところで、もう追求していくしかないかなあというふうに思っています。ですから今回も遺物に斎串のような祭祀的なものがなければこれは館というふうに考えてもよかったですのかもしれないんですけども。おそらく殿村遺跡に非常に近いところに存在したのだと思います。先ほど紹介しました伊達八幡館なんかは、方形区画のひとつは館であって、もうひとつの方形区画はお寺かなというふうに思ってますので、ほぼ隣接しているというふうに考えていいのではないかと思います。しかしひょっとして東側に位置していたのであればもうすでに無くなっているのかもしれませんね。古い段階に削られてしまったのかもしれません。いずれにせよ今後の松本市の調査に期待をしたいと思います。

(質問者) 今回発掘調査したところがお寺の跡だとしましたら、今日の最初の発掘報告では埋め立をして土地を広くしたということなんですが、その広くしたという意味はどのようなことでしょうか。

(講師) 調査で何回もその修理といいますか、造成工事をやっていることが判明しています。先ほど少し事例で紹介しました能仁寺という滋賀県のお寺は京極氏の7代目の守護の個人の菩提寺なんですね。どうも中世ではその領主だけ、あるいは領主の中でも個人だけでお寺を運営してくという事例がたくさんあります。そうなりますとこの殿村遺跡もお寺だと想定すると、その主体者というのは会田氏であろうと考えられます。なぜならお寺とすると当然お寺もそうした領主と命運を共にするということで無くなっていく。逆に言いますと、ある時期会田氏の権力が大きいとお寺もそれに伴って大きくなっていくのではないか。つまりお寺だけの勢力だけではなくて領主との兼ね合いでお寺も大きくなったり廃寺になったりする。逆に領主もその宗教権力と共に大きくなったり小さくなったりするという、両方がリンクしながら存在していたんだろうと考えられます。今までの城館研究では構造論や普遍的な権力構造だけを研究したり、そ

れから宗教権力とは別に考えていたわけですが、どうも領主主導型のお寺というのは完全に歩調を一緒にして大きくなったり、会田氏が没落してしまうとお寺もなくなってしまう。しかしもちろん残っているお寺もですねいくつもあるわけですが、それは領主主導型のお寺ではないという言い方ができるのではないかでしょうか。つまり造成がされてお寺が大きくなるというのはその段階で会田氏が権力を大きくしていったんではないかというふうに考えていいかと思っています。

(質問者) 石垣についてなんですが、お寺とも関係しているという事で、渡来人の技術が採用されたんではないかという疑問があるんです。その点はどうでしょうか。例えば空海と最澄が長安へ行って、いろいろ仏教を学んで帰って来てますし、渡来人も行き来しております。そういうこととの関係もあるのではないかと思いますがどうでしょうか。

(講師) 一番最初に申し上げました古代のお城の場合ですね、朝鮮式山城と言って朝鮮の山城の造り方をそのまま日本に持ってまいりますし、百濟の亡命貴族たちが築城の指導にあたっているわけで、これはまさに朝鮮の石積をそのまま日本で造ってるというふうに考えていいかと思います。この技術というのはおそらく古代的技術であって、古代で一旦その技術は完全に断絶してしまいます。ですから古代の石垣はおそらく平安時代までに完全に解体してしまって、それがもう一度、今度は15世紀か16世紀かというあたりがきわめて微妙なんですが、1400年代から1500年代くらいに新たに山にお寺を築く段階でどうも技術として再生産される。それは古代から連綿と続くような渡来系の技術ではなくて、それは一度断絶して、違う技術としてまた再生産されるというふうに考えてます。ですから殿村遺跡なんかで言いますとまさにその中世に新たに再生産されたもので、基本的に直接的な渡来人との関係というのを考えられません。

(質問者) これからあちこち歩く時に石垣に興味をそそられると思うんですけども、石垣とそれから石積という言い方もあると思うのですが、その違いはどのように見分けたらよいのか教えてください。

(講師) わかりました。今日は一番初めにそれを申し上げなければならなかつたかもしれないんですが、話がすごくややこしくなってしまうので割愛させていただきましたが、殿村遺跡の石垣も本来は石積と呼んだ方がいいのかもしれないです。石垣というのは見えてる面の積んだ後ろに必ず栗石が入っているんです。裏込め石としての栗石が入っているというのを石垣というふうに呼び、地山といいますか土のカットした前にそのまま石を積む、つまり背面に裏込め石が全く入らないものを石積と呼ばうと私は提唱しています。今のところ殿村遺跡からは栗石は検出されていないんですね。ですから私の見解で言いますと、石積と呼ばなければならなかつたのですが、ちょっと石積、石垣の説明をすると大変ややこしくなるので今日は石垣という言い方をさせていただきました。しかし私自身の分類で言いますと殿村遺跡は石積なんです。裏込め石がありません。ところが松本城の石垣では背面に拳大の石がいっぱい入っています。あれが裏込め石なんですね、それが入ってるのを石垣と呼んでいます。それからもうひとつ、私の石垣研究の師匠であります北垣聰一郎先生は隅のあるのを石垣と呼んでおられます。隅というのは石を積んでくと出角とか入角とか直角に曲がっているところですね、あの隅のあるのが石垣で、隅がなく、面のみで積まれているものが石積であるとおっしゃっています。ですから研究者によって石垣と石積の認識は違うのですが、私の説では、裏込めのあるものを石垣、裏込めのないものを石積というふうに考えていただけたらと思います。

(質問者) 今日お話をいたしたことよりもっと古い時代になると思うのですが、実際に山を歩いてみると、岩井堂の辺りはずっと砂岩とか礫岩なんですね。で、虚空蔵山の上の方は黒い安山岩で柱状節理がみられます。それで、今日お話をあった遺跡は全部下の砂岩・礫岩だと思います。何かそういった土の違

いや岩の違いが宗教観に影響するというようなことは考えられますか。

(講師) 例えば中の陣とか秋吉砦にある石垣の石はほとんど安山岩なんですね。こうした石材は遠くから持ってきたわけではなくて、平坦面を造成した時に割った石で造ったんだろうと考えていますので、その宗教ゾーンの所が安山岩地帯で山麓部分が砂岩であるので特に宗教ゾーンで使いわけたわけではないと思います。ただ城の石垣というと遠いところから持つて来るというイメージがありますが、それは決してそうではなく、現地で粗割りした石材を使つていることは間違いないと思います。

(質問者) 古代の石垣についてですけれども、これは天智天皇が最初に造らせたということで今お話をあつたんですが、それはどんな石垣だったんですか。

(講師) 例えば対馬の金田城に行きますと扁平の石を積んでいます。しかしこの扁平な石を積んだというのはどうも古代の石垣ではなく、対馬藩が幕末にロシアが来た時に古代山城の崩れた石垣の上に積み直しをしているようで、下の方を見るとほぼ方形の、1辺が40cm程度の方形の石を横目地が通るように段積みをしています。それがおそらく金田城の積み方なんですね。ところが、これが本州の方へ入つてまいりまして、大野城なんかでは完全に粗割りした石を扁平にして積んでいます。ですから統一規格ではどうもないようですね。で、さつきちょっと申し上げましたけども、金田城も大野城もそれから屋島城とか高安城まで10ヶ所ほどあるんですが、全部監督した朝鮮の百濟の高官の名前はわかってるんですが、彼らが監督しながらその石の積み方が違うというのは石材の違いによるものだと考えられます。本来方形に積みたかったのが要するにできなかつたのではないかということです。ですから金田城は割と四角く朝鮮半島の山城と同じように方形を意識しています。しかしそれが瀬戸内に入つてくるとどうもその割り方ができなかつたようで、粗割りして非常に粗い扁平の石を積むというような形になっています。

(質問者) 先生のご専門ではないかと思うんですけども、朝鮮式の山城を造るきっかけとは何だったのでしょうか。白村江の戦いがあって日本軍は壊滅てしまい、今度は向うから唐・新羅の連合軍が攻めて来る、ということで防衛をしたというふうに聞いているんですけども。

(講師) その前にもうひとつ日本では朝鮮式山城とは別に神籠石という山城があります。これは『日本書紀』や『続日本紀』には全く出てこない城なんですね。この神籠石山城は天智天皇のさらに前、齊明天皇の時に日本と新羅・唐との関係が悪化した時に造つた城ではないかと考えられています。その後白村江の戦いがあって徹底的に負けてしまったので、唐・新羅軍が今度は日本に攻めて来るということで、もっと強力な山城を造らなければ日本の防衛はできないということで、百濟の高官によって造られたものが、朝鮮式山城で、金田城から高安城まで10ヶ所に築かれます。ですから神籠石式の山城も朝鮮式の山城も実は瀬戸内海を通つて高安城までで終わっています。それより東にはないわけですから、大変朝鮮半島を意識している城であることは間違いないと思います。

前回寄せていただいた時に長靴を支給していただいたんですが、その長靴に「中井」とマジックで書かれてるので、これはもうずっと来なければいけないというふうに覚悟しております。それから私はいろんな所で話をしているんですが、これだけ質問をしていただいた所はほとんどないです。だいたい聞かれたらみな帰られるんで、本日は地元のすごい関心の高さを感じさせていただきました。是非この関心の高さをですね、また発掘も見ていただき、皆さん方でいいアイデアを松本市さんの方に出していただき、より良い史跡整備につなげていただけたらと思います。本当に今日はありがとうございました。